「経済・社会・藝術の再定義:「美術・マイノリティ・実践』を読む」 『フィールド・キャラバン計画へ:白川昌生 2000-2007』 水声社 2007年7月30日、39 53頁

|経済・社会・藝術」の再定義 |『美術・マイノ

『美術・マイノリティ・実践』を読む | 稲賀繁美

する白川の強靭な思索。 習や大学教養課程の授業を委ねたい。そうしたならば、地域に根ざした活動から、世界に通用するあらた だろう。これは筆者の夢想というよりは、真に切実な願望だが、白川のような人物にこそ、今日の総合学 速に進行している今日の日本。そこからの脱却に必要な知恵と実践を次の世代が体得するために、おそら ていながら、否、密着しているからこそ、それを起点として、世の中を支配する仕組みの歪みを鋭く摘出 な価値観を発信し、金融拝金主義の悪夢を払拭する糸口となろう。地域におけるマイナーな実践に密着し の成功者の栄光の影で、多数の落伍者を生み出し始め、中流意識が空中分解し、現実的にも階層分化が急 白川昌生にどのような活躍の舞台を提供できるか。その如何に社会はおおきな責任を負わねばならない 市場原理に席巻されて、それ以外の世間的栄達の方向がみえないばかりか、

固執する不利益少数者ならではの卓越した思想的先端性。この逆説を、白川はすでに具現している。 にか、凡百の大学教授程度の知的卓越を遥かに凌駕する高みへと、著者を連れて行ってしまった。底辺に な葛藤を経験してきた思索・実践者ならではの体験が裏打ちされているからだ。八〇年代の日本に異邦人 は、とても間に合うまい。そこには団塊の世代として三つの戦後の時代を生き、ドイツとフランスで知的 なすには、すでに今日の日本の大学で教鞭をとる、四十代のごく普通の社会学者や哲学教師程度の学識で 幸いに『美術、市場、地域貨幣をめぐって』(二〇〇一)、『美術・マイノリティ・実践』(二〇〇五)ほ として回帰し、前橋近郊を拠点としてマイノリティを自負する活動に徹してきた白川の思索は、いつのま かにまとめられている。そこに綴られた言葉は透徹し、明晰このうえないのだが、しかしそれらを読みこ 永遠の知的青年が、これまでに踏まえてきた世界体験と読書体験とから編み出した思索の糧。その成果は 解とは、はるかにかけ離れてしまっていることに唖然たらざるを得ない。まもなく還暦を迎えようとする となるはずだ。 く白川ゼミによる洗礼あるいは洗脳は、格好の「社会的」経験、言葉の優れた意味での「経済的」な教訓 だが、これだけ書いて既に、ここで言う「社会的」あるいは「経済的」という言葉が、世間一般での理

資の論理に乗ったアートマネイジメントなど、アートの本義に悖る愚行だろう。そうした反藝術的な営み 来、世の中の有用性とは折り合わない存在に「藝術」の名が冠せられるのであれば、功利主義的な資本投 う一文を寄せる機会があった。「役」は「厄」でも「薬」でも「妬く」でも「焼く」でもかまわない。本 ートと経済の恋愛学』(二〇〇二一三)図録に、「役にたとうが立つまいが――発明の再興にむけて」とい 「経済的」という言葉について、論者はすでに白川も出品・参画した『第七回北九州ビエンナーレ――ア

「アート」を僭称し、その成功者が藝術家として認知され、世間的な栄達を遂げるのなら、それは経済



『美術・マイノリティ・実践』水声社刊, 2005。

済」とは異質なもの、と想定する論理的必要が生まれてくる。また白川が構想する「社会」に関しても、 〇二年)に、この段階での白川の考察に対する私見を披瀝している。フランス国境に近くドイツに属した 『美術・市場・地域通貨をめぐって』への書評、「『希望』という名の知的投資」(『あいだ』二四号、二〇 原理によるアートの搾取でしかないだろう。とすれば、アートが恋愛すべき「経済」とは市場経済の「経

に、白川の新たな思索と実践の展開に注目したい。その射程を測定し、できれば将来への展望をも注文し たい。[()の中の算用数字は、断らない限り、白川のこの著作の頁数を記するものとする。] 繰り返しを避け、二十一世紀に入っての考察を中心とする著作『美術・マイノリティ・実践』を手がかり 紀転換期から数年を経過した今日の日本では、さらに本質的な変質ぶりが露呈してきた (148)。以下では の体質への違和感が、白川の社会認識には、一貫して表明されてきた。だが経済といい、社会といい、世 空間とそこに鬩ぎあう市民意識を肌で熟知している。それとは似て非なる日本の「公共事業」の官尊民卑 事した体験を持つ白川は、あくまで市民が主体となって構築する、欧州近代社会のパブリック(public) こともあるストラスブールで哲学を学び、さらに国境を超えたデュッセルドルフでヨーゼフ・ボイスに師

「経済」の再定義

またミッシェル・フーコーは、ギリシア語の語源に遡って、自らの存立できる空間を獲得しようと画策 での無限の組み合わせを通じて、その場を維持・構成・管理することを「最広義の経済」と定義する (44)。 上野俊哉・毛利義孝の『カルチュラル・スタディーズ入門』(二〇〇〇)は、有限な資源と空間のなか

か。 部構造を転倒させた図式だが、実際の「市場」は、いわば氷山の一角にも似て、水面下の「非市場」によ 済市場に対して、その水面下には、非市場という広大な領域が潜んでいる。これはマルクス主義でいう下 インドなどの事例を見るならば、国際市場からは不可視のインド国内業者が、英語を公用語とする国情と、 って支えられた顕示部分に過ぎない、という認識が導かれる。 類推で述べるなら、ここに、国際金融市場と国内金融市場との違いを重ねあわせて見ることもできよう 日本では国際ヘッジファンドによる金融操作が国内市場を荒らすことへの懸念ばかりが語られるが、

できない広がりが含まれる。金融資本の投資や投機といった振る舞いが形作る、水面上の狭い意味での経 努力する営みを「エコノミー」と呼んだ(37)。ここには狭義の経済活動と連繋しつつも、それには還元

国際支配を実現している場合すら稀ではない。邪推するならば、所得とは別の「潜在能力」による社会福 国境無関係のインターネットの利点、さらには安い人件費を武器に、米国内の業務を委託して、事実上の

たインド企業の海外委託業務によって、ノーベル賞受賞・福祉経済学者の善意を正面から裏切りつつ、す (239) は、こうし

でに着々と実現されつつある、とも言えようか。 祉の可能性と、それを梃子とした「不平等の解消」を説くアマルティア・センの構想 白川は、ジェンダー批評理論の提唱者、ナンシー・フレイザーの『中断された正義 ――ポスト「社会主

断としてはフレイザーの認識に頼りながらも、白川はきっぱりと別の解決を目指す。 のポリティックスそのものの廃棄を訴えるフレイザーの立論に踏み込む必要は、今はないだろう。 唱する「情動のエコノミー」といった代替経済に希望を繋いでいるように見受けられる。ここで、

アマル

「経済・社会

· 藝術」

の再定義/稲賀

センは財の再分配に腐心するが、それでは問題は解決しないと、ジェンダー論の立場から、

義的」条件をめぐる批判的考察』を援用しつつ、文化研究者として著名なローレンス・グロスバーグの提

43

44

ルデューの「戦略」と、それよりも局所的な「戦術」に注目したイエズス会神父、ミッシェル・ド

大切なのは、まず、白川が可視的な経済と水面下の経済との区別に、フランスの社会学者ピエール・ブ

トーとの違いを重ね合わせようとしていることだ。ブルデューは、社会的栄達を保障する卓越化・差異化

係資本(いわゆるコネ)などが動員されるかを『ディスタンクシオン』ほかの浩瀚な書物で分析した を、身体化された慣習へと取り込むための「戦略」として、いかに商業資本、象徴資本、さらには社会関

(212)。これに対して、ド・セルトーは、『日常的実践のポイエーティク』という新書版の小ぶりな書物

歴史的廃物利用から、見放された公共空間へ

立つ六年間、白川は、 その具体的な実現のひとつが、一九九九年以降の、無人駅をゲリラ的に利用する発表だった。それに先 を舞台に、 たまたまマルセル・デュシャン生誕年とも一致していた。これを奇貨とした白川は、明治天皇ご在所 「場所・群馬」と呼ばれる活動を展開した。この建築の落成した明治二十(一八八七)年 前橋に明治天皇の御臨席を賜るべく、 地元の絹織物業者が出資して建設した「臨江

ことによって藝術作品へと昇進させた便器の複製とを、 天皇・皇后にしか使用が許されなかったといわれる便器と、デュシャンが「R・マット」と署名する 両者敢えて並べて展示するといった悪戯を仕込ん

いた諧謔とともに、歴史的偶然に意味連関を見出して、自らの情動の背景をなす無意識的な地域性・時代 でもみせた。ここには、よし美術であれ、政治であれ、社会的権威が確立される仕組みに対する白川の乾

このように、地方美術館が雨後の竹の子のごとく繁殖した八○年代以降、ほとんど利用されることもな

性を、

意識化して問い直す姿勢がはっきりと窺える。

明治の木造建築は、教育委員会の管轄に属しており、使用手続きが煩雑なうえに、支配者階級の記憶を深 地域の村おこし、 く放置されていた臨江閣に注目した白川は、しかし廃物扱い同然となっていた歴史的建造物の再利用が、 地元の美術関係者の利害関係という権力構造も絡まってくる。これを忌避した白川が、替わりに 町おこしで、公共性を保障され、地方行政の流行となるや、ここからただちに撤退する。 45

見出したのが、「名もなき無数の人々の生活と記憶が染みついた」ローカル線の無人駅、万年赤字線ゆえ

う規範から外され、放置されたままになっている」にも等しい「無人駅」。そこには「集団の神経の末端 もない誰かのために存在し続け、また人以外のすべての存在にも開かれている場所」(60)。「公共性とい 交通の場として、人々の生活を支えながらも、いまや収益採算が悪化したため、消滅寸前のまま 厄介もの扱いの、無名的で無私な、忘却された停車場だった。

国におそらく無数に点在する無人駅」(80)と、人知れず目配せを交し合っているはずだ。そこには、大 の歴史が浮かび上がってくる。さらに、この上毛電鉄で発生している事態は、その空虚さにおいて、「全 が剥き出しになって出現」(76)しており、行政から見放されたその空洞化の背景には、地域産業の盛衰

ともなく、沈黙のうちに、時代と世相とを照射している (257)。 るのが、証券取引・株式投機によって集約した富の権化というべき六本木ヒルズ、その最上階に位置する 地方経済の落ち込みとともに置き去りにされ、廃墟寸前と化した無人駅。その対極として白川の眼に映

都会・東京の繁栄と富の一極集中の代価として切り捨てられた、負の記念碑が、自らを声高に主張するこ

連帯、というオルタナティヴな性質の場」(38)を求める白川にとって、最良の観察地点であり、 森美術館となる。利潤追求と経済搾取の象徴として、下々を睥睨する威圧的な超高層建築。その陰に隠れ て不可視の境涯を強いられている負の代価たればこそ、白川は無人駅への深い愛着を隠さない。 |垂直方向のハイエラーキー志向ではなく、非ハイエラーキー的な水平方向に並列に伸びて行く緩やかな それは

ろしたのでは、美術市場の全貌はかえって見えなくなる。だがこの摩天楼の根元には、その犠牲となりつ 六本木のランドマークを謳歌する森タワー五十三階の森美術館展望室、 . シティーヴューから都内を見下 の麓に広がる土地の記憶、「情動のエコノミー」を備給する拠点となる。

つ、それを支える構造物が、不可視の多重構造のネットワークとして、地下茎のように張り巡らされてい

という権力装置に回収させ、その記念碑を佇立させるがごときは、いまやその藝術理念とは正反対に位置 ない負の虚焦点。そのプラットフォームを足がかりに、白川は、市場に席巻するという戦略的志向ではな 市場的な場を考慮にいれなければ、市場の全体像は見えてこない」。この白川の信念を裏付ける、 る。その一本が地上に露呈した地点、それが上毛鉄道の無人駅にほかならない。「潜在的市場あるいは非 既得権の縄張り荒らしは、ひっきょう簒奪者の権力志向をなぞることでしかあるまい。むしろ七〇年代ソ 働くのであれば、むしろその麻酔に対抗する仕組みを密かに張り巡らせて、美術館を失墜させねばなるま する愚行と規定される。美術館とよばれる仕組みが、もっぱら「美による感覚麻痺の麻酔」として社会に ア・カバコフの顰に倣って(58)、白川は、 連での無名時代に、発表の場から遠ざけられた環境にあって、内輪だけの展覧会を秘密裡に続けたイリ い。といってもそれは、既製の美術館をおおっぴらに否定し、糾弾するような示威行動によってではない。 「ぷらっとフォーム」に代替的な藝術活動の格好の場所を見出す白川にとって、みずからの藝術を美術館 - 美の殿堂」からの訣別と単独工作者の「自由」なる言語遊戯 その表現行為の成果は、機会があれば、事後的に公表して行くので、十分だ、との認識が白川にはあ 現場で「じたばたする戦術的な思考」(28)の実践に取り掛かった。 観客もないままの無人駅で、人知れずパフォーマンスを企て

(80)。現行犯で逮捕されないかぎり、違法行為として取り締まりの対象とはならない行為には、法律

寄る辺なさによって、日本各地を連結するのと同様に。 らも撤退しようとし、 えた労働運動がなし崩しに解体されたまま (19)、税収悪化で行政が最低の生活権を保障する施策責任か 失った表現活動の掃き溜めを見ることも許されるだろうか。彼らは、かつて政治的に被抑圧者の解放を訴 組織なき単独者(138)たる工作者(71)として、人知れず連帯する。あたかも孤立した無人駅が、その 切り捨てられた失敗者たちに「自己責任」を押し付ける状況(117)を前にして、

場所に落書きを記してやまない、おちこぼれと呼ばれる若者たちをも思い起こさせる。そこに、行き場を

による管理社会の臨界が露呈する。現場でそれとは悟られることもなく、無人駅という交通の準無法地帯

製鉄業が荒廃するさまを、幼い日に眼にした白川(68)が、谷川雁とどのような距離を取っていたのか、 このあたりの白川の用語法を見ると、北九州・田畑出身で、 国の産業政策の変更とともに故郷の石炭

だろう。日本の常民の生活に触れる行脚に半生を費やした民俗学者、宮本常一に共感を寄せる白川は、 それは、「日常のなかで静かにしぶとく自分を導いて行く狂気」(67)と表裏をなして初めて得られる境地 さらに知りたい思いに駆られる。とまれ、ここには慈しむべき単独者・工作者の自由が探られる。むろん

導きに従い、世界という遊戯空間との「言語ゲーム」(86) と把握する。そして、この孤独なる連帯を支 す。そこに拓ける世界体験を、白川は、 出させる体験は、対等で安定した相互関係など現実には存在しえないという「非対称性」(168) を際立た 見通せない状況次第の交渉に、アート(art)存立の鍵を探る。社会との接点に研ぎ澄まされた「我」を露 域性に根ざした現場での「接触空間」(161)を大切にし、上下関係にもとづいた決定を排除し、先行きも 逆に、「交渉能力」が目的達成という経済的効率へと切り詰められる危険(155)への批判的自覚を促 孤独なる言語哲学者、ルードヴィッヒ・ヴィトゲンシュタインの

「第三の戦後」と公共圏の行き詰まり

ろう。小熊英二の図式に従えば、敗戦から六○年代末までの「第一の戦後」が政治性と社会性をめぐって 治的手段として使うのは教条主義である」とする考え方が、ほかならぬ「公共圏」の定義に事前に組み込 よくしても「支配を隠蔽している協議のモードを暴露する」程度の効果しか発揮できなくなってきた 全体を危機的な窮地に追い込み、採算と効率化に合致しない公共事業の切捨てが進行している(121,231)。 れ以降の長期構造不況下の「第三の戦後」期は、デフレ、少子化、対応策としての構造改革が、文化事業 には飛躍的拡大を遂げるが、それも未曾有の供給過剰を閲したところで、バブル経済の崩壊を迎える。そ 年代の前衛は七〇年の大阪万国博によって体制に糾合される。公共投資の恩恵を浴びて美術市場も物質的 経済発展下で社会は表向き安定する。「第一の戦後」には公私の緊張を孕んで展開した美術界でも、 民主的変革への闘争に彩られたなら、七〇年代の高度経済成長期から九〇年に及ぶ「第二の戦後」では、 ジョワ公共圏の自由主義モデル」(153) と規定する。だが、歴史的・社会的にその限界はすでに明らかだ 「社会」の姿が、仄かに見え始める。白川は、従来の社会的な規律を、ハーバーマスの用語に従い (150)。さらにマイノリティであれ、ジェンダーであれ、構造的に被抑圧的な劣位に置かれた立場を「政 こうした推移を背景として、従来の「公共圏」の枠組みのなかで許されるマイナーな側からの発言は、 こうして、行政が模範とし、管理・運営してゆくことを責務と考えている「社会」とははるかに異質な 抑圧的な装置と化す。こうして世界の一元的支配が貫徹されようとしているおぞましい光景が、おそらく かで、官僚機構を媒体に、このうえなく合理的に、しかもその合理性を正当性の根拠として、従来以上に った文化遺産が、国際基準に合うように変質を余儀なくされている事例も報告されている。国際基準に適 は、国際基準に合致するか否かによって、当該の文化遺産の継承か切り捨てかが振り分けられ、候補とな は警鐘を鳴らして止まない (156)。実際、ユネスコの世界遺産、無形文化遺産認定の実務協議の席などで さない。「住民参加」といった国際公認の基準が、かえってイデオロギー的教条化を遂げる危険に、白川 成権力の温存・延命に格好の口実を与え、現実の行政判断の硬直化に貢献している事実を、白川は見過ご が、「第三の戦後」の「イデオロギーの終焉」後も、惰性のように維持されている「政治の忌避」が、既 い、有効かつ正義を以て任ずる「メイジャー」な「公共圏」の規則が、道徳律と経済原則との結託とのな

「贈与」による「社会」の再定義へ

白川には、はっきりと見えている。

L'inscription du travail," in Tel Quel, Théorie d'ensemble, 1968, pp.188-211.)。精神分析とマルクス主義経済学 想家のジャン=ジョゼフ・グーが提唱していた図式を思い出してみよう(Jean-Joseph Goux,"Marx et 白川 、は本書では言及していないことだが、ここで、すでに六○年代末の構造主義革命の時期に、

とを大胆に交差させるグーによれば、労働に対する資本の関係は、無意識に対する意識になぞらえること

まれている(154)。政治・宗教を除外する中立主義が日本の行政やその国際文化交流の機軸となっている

放し、生産の無意識に遡り、その現場の話し言葉を回復しようとする試みである。 もはっきりとした輪郭を描くだろう。市場経済から藝術生産を救う白川の企み。 揮する。資本主義は、自らを支える労働を無意識へと抑圧することを代価として、自らを意識的なイデオ 次第の可変的な即興性を宿しているなら、書き言葉は社会契約の約定であり、強制力を孕んだ体系性を発 ができ、さらにそれは、話し言葉に対する書き言葉の関係に類比できるという。話し言葉がその場の状況 ロギーとして構築する。今から顧みれば、いささか単純な図式だが、これを念頭に置くなら、 いう、貨幣による一元的支配を貫徹する世界のまっただなかで実現し、実践してゆくかという問いだ、 だが一番難しい問題は、 いわば無償の生産という、多様にして流動的な世界を、 それは資本から労働を開 いかにして資本主義と 白川の試み

·労働」は、交換規則に束縛され、負債の恐怖と裏腹の義務感に支えられた強制力を発揮する。

産・余剰価値が労働に要求されるならば、余剰を資本として搾取されないような、別途の交換経路を確保

白川は述べる(188)。そこで白川が希望を繋ぐのは、前著にも登場した「贈与」の概念である。

するという回避手段を講じることはできまいか。マルセル・モースの『贈与論』が一九二〇年代の世界経

を栄誉として受け入れた。思えば、無償の惜しみなき贈与こそが自然の掟であるのに、近代人は資源を一 さらに白川は、ジョルジュ・バタイユが『呪われた部分』で取り上げた、古代アステカの供犠に注目する 済恐慌期に出版された事実のうちに、白川はモースの近代社会にたいする危機意識を読み込む(232)。モ ースは北米西海岸の原住民の習慣であった、歓待の宴席における蕩尽すなわち「ポトラッチ」に注目した (246)。競技の勝利者は、 功利的な計算からみれば富をみすみす犠牲にする愚行が、敢えて意図的に犯される。 太陽の無事な運行を司るための犠牲として自らを祭壇に捧げ、人身御供の陶酔

方的に搾取することをもって、社会にあるべき経済活動として正当化してきた。とすれば、ポトラッチの

51

「愚行」や自己供犠の「狂気」には、 人間存在が自然からの恩恵に対して負う負債を象徴的に帳消しにす

る「祝祭」を認めねばなるまい。 ここで白川は、最近物故した今村仁司が『交易する人間』で展開した分析を参照する。それによれば

"Wirtschaft"も「気前のよさ」を意味していたものが、十九世紀半ばの国民国家成立期以降、今日言うとこ 社会的social」とは元来「対価や見返りのない贈り物の提供」を意味した言葉であり、 ドイツ語

数の敗者を生みだす歪んだまやかしの空中楼閣にすぎない。むしろ「作品では食べて行けない」(27)マ される有名藝術家が信望する今日支配的な藝術観は、実際には、一握りの特権者(minority)のために多 (minor) にこそ、対価や見返りを期待しない贈与者となる可能性そして夢が託される。 イナー(minor)で無名な存在こそ、実際には社会の大多数(majority)を占めており、かかるマイナー の絆、社会形成力を回復する術(art)として、美術を再定義する道が開けてくる。メジャー(major)と ろの「社会society」「経済Wirtschaft」へと変質したのだという(196)。ここから、贈与によって人間関係

可能性を探っている(245)。この白川の「贈与」に、我々はいかに応じうるのだろうか。この責任=応答 は異質の歓待の掟に希望を繋ぎ(238)、バタイユとともに、「贈与する自由」に、人間に残された最後の 定義してこれを確保するべく努めた。このスピノザの議論に共感を寄せる白川は、行政による社会福祉と スピノザは、国家という有限なる存在には回収できない余剰を、無限なる神が人間に与えた「自由」と

能力(responsibility)が、今問われている。(キ)

(ワシントンDCにて、二〇〇七年五月十七日)

- 十一月号、十二月号、二〇〇〇年一月号に連載)が、鋭い考察を展開する。 この点については、白川昌生「美術と文化政策――国際交流展とは何か」(『あいだ』四七号―四九号、一九九九年
- 2 もおすすめしたい。 モースを超えてほしかった」『あいだ』三六号、二〇〇七年四月二十日)。藝術振興のための行政による「贈与」の表面的 ストは貧乏なのか』(山本和弘訳、grambooks)に、飽き足らないとする批判的書評を寄せている(「《書評》ブルデュー の大著『富めるが故の惑い――黄金時代オランダへの一解釈』(高山宏氏による題目訳案。未邦訳、原著一九八七)の繙読 分析以上に踏み込まぬ原著者の限界は、白川の述べるとおりだろう。オランダ金融資本については、サイモン・シャーマ 白川は最近訳出されたハンス・アビング(アムステルダム大学教授、藝術経済学)著『金と藝術――なぜアーティ
- 3 「異文化理解の倫理にむけて」(杉島敬志〔編】『人類学的実践の再構築』世界思想社、二〇〇一年、七六―一〇一頁)に筆 ただ、この歓待の掟に関する議論は、哲学的考察としては、なお将来に課題を残す。不十分なものだが、稲賀繁美
- 代的な「藝術」観念がすでに有効性を失った現時点から"ars"と"techne"の未分化状態に遡って将来を展望する考察を展開し くり』再考」(稲賀〔編〕『伝統工藝再考――京のうちそと』思文閣出版、二〇〇七年〔近刊〕、八一四―八三一頁)に、近 者としての考えの見取り図がある。 なお、脱工業化・情報化社会における「ものつくり」の意義に関しては、稲賀繁美「工藝の将来あるいは『ものつ

伸一染谷滋白川昌生発行者鈴木宏発行所株式会社水声社東京都文京区小石川二―一〇―一 第一版第一刷——二〇〇七年七月三〇日印刷 紙工乱丁落丁本はお取替え致します。 http://www.suiseisha.net ISBN978-4-89176-646-7 ―二四三七郵便振替○○一八○―四―六五四一○○用紙岡田紙店印刷ディグ製本東京美術 いろは館郵便番号一一二―〇〇〇二電話〇三―三八一八―六〇四〇FAX〇三―三八一八 フィールド・キャラバン計画へ奥付著者松浦寿夫北澤憲昭稲賀繁美福住廉真武真喜子花田 二〇〇七年八月一〇日発行